

老子の人物、學術及其時勢（承前）：論説

著者	兒嶋，献吉郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 4
ページ	1 - 6
発行年	1899-10-25
その他の言語のタイトル	老子の人物、學術及其時勢（承前）：論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/5364

龍南會雜誌第七拾四號

論 說

老子の人物、學術及其時勢

(奉前)

教授 兒嶋 猷 吉 郎

第六 其言語、文章

老子道徳經は萬物を達觀し、萬事を玄覽して、絶對的無差別を絶叫せるものなりと雖も。彼の胸底には猶自他の別あるなり、彼我の分あるなり、好惡の念横はれるなり、利害の情存せるなり。貧富榮辱を度外視する能はざるなり。況や又生死を同一視する能はざるなり。故に彼の字句にのみ拘はりて、彼の着想に溯らざるは、皮相の見なり。彼の言語にのみ泥みて、彼の立意を究めざるも亦不可なり。蓋し彼は時勢の逆流に磯激えて、狂瀾を既倒に廻さんと欲するを以て、其言語往々奇矯に過ぎ。其文字亦時に奇激に失する所無きに非ず。試に其二三の例を挙げん。

一、彼は自然を主張せるものなり。然るに彼は世道の日に汗下に就くと、人心の日に腐敗するを視て。決えて自然の勢に任せて、自ら黙止する能はざるなり。乃ち自ら疾聲大呼して、其人心を矯揉まて嬰兒の無知に復歸せまめんとす。其世道を挽回えて太古の無事に復歸せまめんとする。是れ其言動已に自家の教義に背くのみならず、世道人心をして自然の勢に背馳せしめんと欲するものに非ずや。

二、彼は無心無爲を主張せるものなり。然るに彼は周の衰へたるを見。遂に去りて關に入らんとす。是れ果えて何の心ぞや。若し天下の如何とも爲すべからざるを憤慨せりと謂はんか。則彼已に無心に非ざるなり。況や關に入るに及び、尙五千餘言と著して經世の大業、不朽の盛事に懸念せるものなり。亦將た何の心ぞや。若し關令尹喜の懇請辭すべからざるものありと謂はんか。則ち彼は情誼を重するものにして、無心の徒に非ざるなり。若し又自家の抱負を五千餘言に托して、知己を千載の後に求むと謂はんか。則ち彼は有爲の士に於て、功名を重するものなり。亦決して無心無爲の徒に非ざるなり。且彼の所謂聖を絶ち、智を棄て、仁を絶ち、義を棄つることは（第十九章）。固より有意的工夫に属するものに非ずや。又彼の所謂雌を守り、黒を守り、辱を守るの工夫の如き（第廿八章）。固より智慮分別を要するものに非ずや。何んとなれば其雌を守らんと欲すれば、先づ其雄を知らざるべからず。其黒を守らんと欲すれば、先づ其白を知らざるべからず。其辱を守らんと欲れば、先づ其榮を知らざるべからざればなり。況や三十六章、四十二章、及び六十五章の如きは、皆權謀を説けるものに於て。決して無心者流の口より露出すべき言に非ざるをや。

三、彼は是非善惡一切無差別を主張せるものなり。試に見よ、彼は第二章に於て美、醜、善、不善を同視す。第十三章に於て貴賤寵辱を一視し。第二十章に於て唯阿善惡を同一視したるか如き。其言高妙に於て人の意表に出つると雖も。第二十七章に善人は不善人の師、不善人は善人の資と云へるに因りて察すれば。彼の腦底には明かに善不善を差別的に觀察せるものあるなり。又第三十九章に貴は賤を以て本と爲さず、高は下を以て基と爲すと云へるが如きも。亦彼の觀念が決して貴賤高下を同一視せるものに非ざるを知るに足るべし。故に余は斷言せんとす、彼の言語文章は往々自家の意想外に奔溢せ

るものありと。

然り、彼の言語は洵に奇矯なり。彼の文字は眞に奇激なり。唯其奇矯なるか、故に能く時人の耳を傾けしなり。奇激なるか、故に能く後人の心を奪ふなり。夫れ新を喜ひ奇を好むは、人情の常にまて、古今東西同じく然る所なり。況や周末辯を好み辭を弄するの世に際まて、苟も天下の耳目を聳動せんと欲せば、勢必ず古人を凌駕え、陳言を打破して別に一旗幟を樹てざるべからず。故に彼の眼底固より古人無きなり。先王無きなり。堯舜を祖述せず。文武を憲章せず。務めて自ら陳言を去りて、新に一家言を立て、一世人を風靡せんと欲す。故に孔子禮を問ふに及んで、彼は先づ口を開きて曰はく。子所言者、其人與骨皆已朽矣。獨其言在耳と。是の一言以て彼の意の在る所を窺ふに足るべき。若し夫の奇矯の言と、奇激の文とは、實に已むを得ざるの手段にまて、脩辭上却て取るべき所多し。

要するに彼亦人なり。木石に非ざるなり。焉んぞ能く萬事無心なるを得んや。又焉んぞ能く一切無差別なるを得んや。蓋し彼自身と雖も亦已に自家の意象及び行動に徴まて、到底其説の實行し得べからざるを知らん。然るに彼の本來の目的は、時弊を矯正するに在るを以て。彼の舌端は常に無心を鼓吹せるなり。彼の筆鋒は常に無知、無欲、無差別を保障せるなり。故に彼の言語は奇矯にして、往々其行動と一致せざる所あり。彼の文字は奇激にまて、時に其意象の外に超脱せるものあるなり。而して余は特に彼の立論の奇と脩辭の妙とを稱道せんと欲するものなり。

試に老子の文を評せんに。其文簡にして其意高く。其句短くまて其味長え。故に司馬遷は彼の文を評して微妙識り難しと云へり。然れども其造句の精鍊にまて、文中に助字の少きは。蓋え尙書以外稀に見る所なり。且文中往々押韻の所あり。是れ亦古文の常にまて、周易及び尙書等に此例多し。故に一た

び彼の文を讀むものあれば、必ず其立論の奇に驚くと同時に、亦其脩辭の妙を賛歎せざるはなし。且五千餘言は全く一人の手、一時の筆に成りたるものなるを以て。通篇の文字前後脉絡一貫、えて、少々も懈怠の處なま。之を論孟の二書、門人の手を假りて、昔日の答問を編輯せるものに比すれば、特に珍重すべきなり。何んとなれば論孟には中年の意見と、晩年の議論と、彼此混淆、先後重複せる所多きと雖も。道德經は應對質疑の書に非ず、一氣呵成に自家の經綸策を流露したるものなればなり。

第七 其學問の源流

人は謂ふ、老子の學は黃帝より出てたるものなりと。是れ陋見のみ。況や老子の學は易より出づると謂ふものに於てをや。若し老子をして人の後塵を追ひ、人の餘瀝を嘗め、人の陳言を誦するものならしめんか。何等の厚顔を以てするも、孔子に對して子所言者、其人與骨皆已朽矣との罵倒的辭氣を出すことを得んや。蓋之彼の氣象と、彼の識見とを以てすれば、彼は必ず骨朽的人物を祖述することを好まざらん。彼は必ず務めて陳言を去りて、一旗幟を樹つることを欲せざらん。故に彼の書中屢聖人の無爲を稱せりと雖も、未だ嘗て黃帝を口にしたる所なま。況や堯舜をや。況や禹湯文武をや。蓋し彼の所謂聖人は全く理想的聖人に、て、決して骨朽的人物に非らざるや論を俟たざるなり。故に道德經五千餘言を以て老子の學問の真相を卜知すべきものとすれば、彼の學問は決して祖述的學問に非ずして、實に彼の心胸より作り出だしたるものなり。全く一家の創見なり。洵に、一己の斷說なり。彼の眼底固より古人無きなり。而して後世の道家者流は尙古の弊風に驅られ、儒家が堯舜を祖述せるを視て、己れも亦教祖以外更に大祖を求めんと欲し、遂に其祖を黃帝に歸して、黃老並稱するに至れり。こは唯に老子の意に非ざるのみならず。亦大に老子の價值を損するものなり。況や列子に道德經

中の一章を引きて、黃帝の言と爲せるものゝ如きは。洵に黃帝を誣ふるものなり。老子を抹殺するものなり。無稽の甚しきと謂ふべし。若し黃帝を以て彼の理想的聖人の本體たりと謂はんか。黃帝は舟車を作り、衣冠を制し、貨幣を作り、城邑を營み、文字を制し、曆、算數、律呂を發明せりと傳へらるゝ大有爲の英主にまて。實に支那文明の祖なり。決て老子の所謂無爲、無心、無知なる理想的聖人の徒に非ざるなり。若し黃帝を以て無爲の聖人と見做すことを得べくんば。堯の蕩々たる、舜禹の巍々たる、皆稱えて無爲の聖人と爲すことを得べけん。故に彼の書中の所謂聖人は決て三皇五帝の如き骨朽的人物を指定せるものに非ざるなり。彼の學問は實に彼自身に其淵源を開きて道家の祖と爲りしものなり。彼は決て黃帝の下風に立ちて其陳言を稱することとを好むものに非ざるなり。

老子の眼底古人無きは、已に前に陳べたるが如し。而して後人が彼の流風を趁ひ、彼の感化を被りたるもの少からず。彼の道は實に儒教に頡頏して、人心を千載の下に支配したる形迹顯著なり。關令尹喜は親炙したるものなり。莊列、申、韓は私淑したるものなり。秦漢之際、呂不韋の呂氏春秋に於ける淮南王安の淮南子に於ける。皆老莊の流を酌みて、其意を敷衍したるものなり。其他漢魏六朝の際に及んで。天子とまては文帝の西漢に於ける。桓帝の東漢に於ける。元帝の梁に於ける。皆老子を篤信して、其旨義を實行したるものなり。政事家とまては漢の蕭何、曾參。晋の王導、謝安。亦老子を仰宗して、僅に其皮相を解し得たるものなり。學者として魏の何晏、王弼等は道教と儒學とを參酌したるものなり。放逸の士として晋の嵇康、阮籍等は老莊を假りて禮法を破壊せんと欲するものなり。蓋玄漢は當初道教と儒教と互に頡頏するの勢ありしが、畢竟儒教の勝利に歸したりき。然るに晋に至りて天下の人心一般に儒教的禮法を厭棄して、老莊的趣味に傾き。結局道教の勝利に歸せたりと云ふことは。當時清

談の士が何如に君民上下の間に歡迎せられしかを見ても知るべし。降て梁に及んで天子自ら龍光殿上に老子を講し。敵兵已に近づくも猶輟めず。百官皆戎服を着て聽講せしが如き。亦以て當時の人心が老子を篤信死守するの傾向ありしを知るに足れり。李唐に至りては老子と姓氏を一にせる故を以て特に之を尊崇し。高祖は廟を立て。高宗は太上玄元皇帝の尊號を贈り。玄宗は又玄學博士を置きて其學を修めしむ。其風因襲して宋に至り、元に至り、明に至り。遂に今日に馴致して、一種の宗教的組織を作まつたるが如き。亦決て老子の意に非ざるなり。要するに老子の學問は彼自ら其淵源を開きて諸子百家の祖と爲り。永く天下の人心を儒教以外に支配したるものなりと謂ふべし。

雜 錄

傳染病に就て

緒 言

囑託衛生醫 柿田末四郎

病の起るは起るの日に起るにあらずて必ず基因する所あり故に其の本を究めずして其の末を治めんと欲せば當に藥石の効驗を得る能はざるのみならず病毒は遂に深く膏肓に入りて救ふ可らざるに至らんとす假令一時を彌縫して一旦の安きを偷むも亦た終生の憂を貽すに至らん蓋し人の病あるは猶は花の風に於ける月の雲に於けるがごとく天地自然の變化に依りて生ずるものにまて人力の得て制す可らざるが如きの觀ありと雖も苟も其の毒焰を消滅まて天稟の幸福を全からまめんと欲せば優